

Ishikawa, K., Suzuki, H., & Okubo, M. (2014).  
The effect of social anxiety on metaphorical association  
between facial expression and brightness.  
Object Perception, Attention, & Memory 2014,  
Long beach, California.

石川 健太

先行研究では、社交不安をもつ人の非適応的な感情調整について報告されてきた (Farmer & Kashdan, 2012; Wong, Morrison, Heimberg, Goldin, & Gross, 2014)。例えば, Farmer and Kashdan (2012) は、社交不安をもつ人は健常者よりもポジティブな感情体験が少ないことが報告された。また, Wang et al. (2014) の研究では, Implicated Association Task (IAT) を用いて自己と感情語の結びつきを検討した。その結果, 社交不安をもつ人は、ポジティブ語と自己の結びつきが弱いことが示唆された。こうした非適応的な感情調整が生じる背景には、内的な感情体験と外的な物理特性をつなぐ比喩的関連づけの低下が関わるかもしれない (Barsalou, 1999; Meier, Robinson, & Clore, 2004; Lakoff & Johnson, 1999; Okubo & Ishikawa, 2011)。

そこで本研究では、Okubo & Ishikawa (2011) の実験に基づき、社交不安が表情と服装の比喩的関連づけに与える効果を検討した。社交不安をもつ人は、ポジティブな感情体験が弱い (Farmer & Kashdan, 2008; Wang et al., 2014)。そのため自身のポジティブ感情と外的な情報との比喩的関連づけが低いという仮説を立てた。仮説に基づく予測として、「1. 社交不安が低い人と異なり、社交不安が高い人は表情と服装における感情価の一致効果が弱い」「2. こうした感情価の一致効果の低下は、ネガティブなものよりもポジティブな感情価で顕著に生じるであろう」という予測のもと実験を行った。

参加者は私立大学の大学生, 大学院生, 80名であった。平均年齢は20.6歳, 標準偏差は1.3であった。参加者を社交不安高群と低群に分けるために、笹川・金井・村中・鈴木・嶋田・坂野 (2004) の日本語版Brief Fear of Negative Evaluation Scale (以下, BFNE) を実施した。BFNE得点の上位25%を社交不安高群 (20名), 下位25% (20名) を社交不安低群とした。

課題は半視野提示法による表情判断課題を用いた。参加者は、注視点を注視し続けること、できるだけ素早く正確に表情の判断を行うよう繰り返し求められた。実験が開始するとディスプレイ上に注視点 (500 ms) が提示された。次に、注視点から3°離れた左右いずれかの位置に、表情刺激が提示 (168 ms) された。参加者は、提示された表情刺激がポジティブならば両手の人差し指を使ってGとHのキーを押し、ネガティブならば両手の中指でFとJのキーを押しした。キー反応は参加者ごとにカウンターバランスをとった。このとき, Okubo & Ishikawa (2011) に基

づき、表情判断を行う際に制限時間を設定した。参加者の反応が制限時間よりも遅れると、ピープ音と共に“反応が遅いです”とディスプレイ上に表示された。実験計画は被験者間1要因（社交不安）、被験者内3要因（表情（ポジティブ、ネガティブ）、服の色（白、黒色）、提示視野（左視野、右視野））の混合計画であった。

実験計画に示した各条件について、参加者ごとの正答率を算出した。社交不安、表情、服の色の交互作用が有意であったため ( $F(1, 38) = 5.1, p = .02, \eta_p^2 = .11$ ), 社交不安ごとに表情と服の色の分析を行った。その結果、社交不安高群においては、表情の主効果 ( $F(1, 38) = 2.0, p = .17, \eta_p^2 = .09$ ), 服の色の主効果 ( $F(1, 38) = 1.9, p = .17, \eta_p^2 = .09$ ), 表情と服の色の交互作用 ( $F(1, 38) = 0.2, p = .63, \eta_p^2 < .01$ ) のいずれにおいても有意差はなかった。一方、社交不安低群では表情と服の色の交互作用が有意であり ( $F(1, 19) = 7.6, p < .01, \eta_p^2 = .28$ ), ポジティブ感情条件では白色の服装の方が黒色の服装よりも正答率が高かった。一方、ネガティブ感情条件では白色の服装よりも黒色の服装の方が正答率は高かった。

実験の結果、社交不安低群と異なり、社交不安高群では表情と服装の感情価の一致効果がなかった。この結果は本研究の仮説を一部支持するものであり、社交不安が高い人は自身の感情体験と外的な情報との比喩的関連づけが低下していることを示唆した。先行研究によると、比喩的関連づけは非意識的に行われるが (Barsalou, 1999; Meier et al., 2004; Lakoff & Johnson, 1999; Okubo & Ishikawa, 2011), 本研究では、こうした非意識的な処理に対して社交不安が影響を与えることを示唆した。社交不安をもつ人に対する介入の際には、適切な比喩的関連づけが行うことができるような支援も必要かもしれない。

## 引用文献

- Barsalou, L. (1999). Perceptions of perceptual symbols. *Behavioral and Brain Sciences*, **22**, 637-660.
- Farmer, A. S. & Kashdan, T. B. (2012). Social anxiety and emotion regulation in daily life: Spillover effects on positive and negative social events. *Cognitive Behaviour Therapy*, **41**, 52-162.
- Meier, B. P., Robinson, M. D., & Clore, G. L. (2004). Why good guys wear white. *Psychological Science*, **15**, 82-87.
- Okubo, M. & Ishikawa, K. (2011). Automatic semantic association between emotional valence and brightness in the right hemisphere. *Cognition and Emotion*, **25**, 1273-1280.
- Sasagawa, S., Kanai, Y., Muranaka, Y., Suzuki, S., Shimada, H., & Sakano, Y. (2004). Development of a short fear of negative evaluation scale for Japanese using item response theory. *Japanese Journal of Behavior Therapy*, **30**, 87-98.
- Wong, J., Morrison, AS., Heimberg, RG., Goldin, PR., & Gross, JJ. (2014). Implicit associations

in social anxiety disorder: the effects of comorbid depression. *Journal of Anxiety Disorders*, **28**, 537-546.